殺戮連鎖

活字の錬金術師

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
殺戮連鎖

【Ｎコード】
Ｎ６５２７Ｚ

【作者名】
活字の錬金術師

【あらすじ】
最近、道ばたで首の無い死体が転がるという奇妙な事件がこの町「川崎」で起きている
おかげで町中大混乱「死」への恐怖が充満したこの町で生きていく事は想像以上に萎える。
俺達はまるで檻の中の豚だ。
俺は早乙女龍貴、俺の夢、それは、この不可解な事件の犯人を暴く事だ。そしてその犯人が絶望に満ちる顔が見たい。
暴く方法なんて思いついてないけどな

これから起きることで僕は知る、「危機は突然」

「近付いてくる」

序章：空を飛ぶ奴ら（前書き）

さて、新作来ました！！！苦手な人はあまり見ないで下さい、本当に意味の無い小説なので

序章：空を飛ぶ奴ら

※注意、この小説はタイトルのように残酷な表現が大量に出てきます、それをご覚悟の上、お読み下さい。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

これから始まる物語、それは、漫画雑誌で連載したら、１０週で打ち切りになる程、いや、１０週も掲載することももったいない、１週で打ち切りしても良いほど、ひどい作品だ。そんな作品を読む覚悟があるかい？

自分をクズだと思った奴は、読むが良い。君たちはこの作品を最後まで見るとさらなるクズになる。

嫌なら、今すぐこのページを閉じて。

それでもいいなら、この作品を読みたまえ。僕は忠告したよ、後悔しても僕に当たらないでね？

本当につまらないからね。こんな作品見たところで意味はないよ。

なんせ、僕がかいた話なんだから

じゃ・・・・どうぞ　クズへの扉へ

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

最近、道ばたで首の無い死体が転がるという奇妙な事件がこの町「川崎」で起きている

おかげで町中大混乱「死」への恐怖が充満したこの町で生きていく事は想像以上に萎える。

俺達はまるで檻の中の豚だ。
俺は早乙女龍貴、俺の夢、それは、この不可解な事件の犯人を暴く事だ。そしてその犯人が絶望に満ちる顔が見たい。
暴く方法なんて思いついてないけどな
これから起きることで僕は知る、「危機は突然」

「近付いてくる」

俺は今日もいつものように学校へ向かった、そして、いつものように席に着き、いつものように授業を受けた。
しかし「いつも」はそう長くは続かなかった
「なんだアレ！！！」
俺の隣の席の田村工が立ち上がり指を窓へ向けて叫んだ。
そして、
・・
アレを見た他の奴らも次々に立ち上がった。
俺もそれに釣られて窓を見たんだ、その光景を見た俺は、目を疑った。
学校の窓の外には大きな交差点がある。
そしてその交差点をはさむかのように、ドン・キボーテとイドーノーカドーが佇んでいる。
ちょうどドン・キボーテとイドーノーカドーの真ん中あたり
その上空で、たくさんの黒いマントを首からかけて体が見えない状態の人が飛んでいた。
いや、アレは人じゃないのかもしれない。学校の窓を通してからでもわかる禍々しい気配。
その気配に俺達は立ち竦んだ。

俺達はその空を飛んでいる集団に気を取られすぎていた
「おい！アレ見ろよ！」
工がまた叫んだ
「！！」
俺は絶句した。目の前で繰り広げられていたのは、空を飛んでいた集団の仲間だと思われる奴らが人の首をあらゆる方法で飛ばすと言う残酷な行為だった。

手で首を飛ばしたり、頭を先頭にしすごいスピードで人の首に突っ込んでいって頭で首を飛ばしたり、足で蹴り飛ばしたり、首を飛ばすのに手慣れた様子だった。

その残虐な様子を見ていた俺達を更なる恐怖が襲う。
空を飛んでいた集団の一人がこちらに気付いたらしく、こちらへ飛んできた。
靡いた漆黒のマントは「死」を意味したように思えた。
クラスのみんなはパニックになり教室中を走り回ったり、独り言をしゃべり出す奴さえいた。
「みんな！教室から出るんだ！！」
先生がみんなを教室の外へ誘導した、廊下には既に他のクラスの生徒達が居た。
ガッ！！！窓を割って、黒い髪の毛を垂らした男が入ってきた。
浮かんだ体がゆっくりと地面へ近付いていった。
廊下は他のクラスの生徒達で埋まっていて、とても避難できる状態じゃなかった。
俺達は、更なる恐怖を味わう、俺は生まれて初めて「死」の恐怖をこれほどまでに味わったのだ。

s
e
e

y
o
u

n
e
x
t

t
i
m
e.

序章：空を飛ぶ奴ら（後書き）

次話、楽しみにして下さい。

始まった人類排除（前書き）

２話です、今回の作品のネームを無くしてしまったので、うろ覚えで、書き直しています。前のネームよりはうまくかけそうです。

始まった人類排除

窓へ飛び込んできた男は顔を上げこちらを睨んでいた。
あちらは攻撃してくる様子もなく、ただ立っているだけだ。
こっちはその恐怖に耐えきれなくて涙を流して膝をついたり、必死で震える足をとめようとしていたりする。
「龍貴・・・」
背後から俺を呼ぶ声がした。
俺は後ろを振り向いた、そこには怯えている同級生の櫛枝咲(くしえださき)がいた。
「・・・咲」
その怯えている顔を見て、俺は悲しくなった。
咲は幼稚園からの幼馴染で、小さい頃から片思いしている、もちろん今も咲の事が好きだ。
怯えている咲を見て、悲しい感情以外にもわいた物があった、「守りたい」という感情だった。
俺は咲に良いところをみせたかったんだ。子供の頃からかっこいいところをみせようとして失敗しての繰り返しだった。
今、こんな危機的状況になってもまだそんなことを考えている自分がいた。
「大丈夫、俺が守ってあげる」
俺はそういって男の方をむいた、俺も怯えているからだ、怯えているかっこわるい顔なんか咲に見せられない。
生徒が非常口へ逃げ込み、廊下から人が少し減ってきたとき、みんなの怯えている声がすこし落ち着いた後だった、男の長い髪の毛が逆立った。
そして、知った。
今まで感じていた恐怖(モノ)は、ほんの少しの恐怖だったということ。
男の髪の毛が逆立ってから、殺気というモノがなんなのか。生まれて初めてわかった。

ブオッ！

男から強い風が吹いた。そしてそれと同時に男はこちらへ頭を向けて飛んできた。

「ヤベェ！！！」「来た！！」「速く階段おりてよ！！！！」

みんなの焦る声が飛び交う。

俺が手を顔の前に置いた時だった。その時逆方向から風が吹いた。

その風が吹くと、俺は目が開けられなかった。

ガシッ！

何か音がしたと思うと、俺は目を開けた。

「！！誰？」

俺の目の前には、頭を右手でガッチリ掴んで飛んでくる男の動きを止めた煙草を口にくわえた男がいた。

「俺？山田太郎だけど？」

と言い、山田太郎という胡散臭い如何にも偽名っぽい名前の男がこちらに向かって左手でガッツポーズを作った。

「・・・」

俺は言葉が出なかった

「お前何者だ。人間じゃないな」

と頭を掴まれた状態で男がいった。

「俺？人間だよ」

山田太郎は掴んだ頭を前方に投げた。

飛ばされた男はそのまま窓の外へ飛んでいった。

そして口で笛を吹き他の仲間を呼び出した。

そして指を鳴らした。

突然
「人類諸君！」
と、とてつもなく大きな声が響き渡った。
「おっ！始まった始まった」
といい山田太郎は携帯をとりだし、ワンセグを見始めた。
(今、川崎で空を飛ぶ謎の集団がーーーー)
山田はニュースを見始めていたのである
「人類は増えすぎた！」
「これから人類を排除する！」
「お前達がゴキブリを排除するのと同じように」
とまたすごく大きな声が響いた。
(Ｈｕｍａｎ ｂｅｉｎｇｓ ａｒｅ ｅｌｉｍｉｎａｔｅｄ！)
(从?在?始排除人?！)
携帯から全世界のようすが報道された。アレは各地の言葉で全世界に死刑判決を言い渡したのだ。
それからもアレは長々と同じような事を話し続けた
そして、言い終わるかと思うと、今までで最も大きい声で
「散！！！！！！！！！！！」
と叫んだ
その声と同時に大量の黒いマントをしたアレが一瞬にして消えた。
そして三人程ここに残った
アレが消えた数秒後にニュースの映像に映り込んだ。
彼らはわずか数秒にして外国へ飛んだのだ。
そして、彼らの排除活動は始まった。
町中の人の首を飛ばしていた。
そして俺はふと、疑問に思ったことがあった。
こんな時にこんな疑問が思い浮かぶのは可笑しいと思うけども。
そのこんな疑問というのが「彼らは何故首を飛ばすのだろう」

という疑問だ。
彼らは大量にいるのにみんな同じ殺し方をする。
何故か、俺には不思議でたまらなかった。

「アイツらを止めたいか？」

いきなり山田太郎がこちらを向き話しかけてきた。
そして即答だった
「はい、止めたいです」
みんな校舎内から避難し終わってシーンとした空気の中に俺の声は響いた
「お嬢ちゃんも？」
と山田太郎は言った
お嬢ちゃん？ここには俺しか居ないはずだ。と思い後ろに振り向いた。
そこにいたのは咲だった。
咲は
「私も龍貴と同じように、あの人達を止めたい！」
と言った
山田太郎は嬉しそうな顔をして
「残ったのが君たちで良かった」と言いポケットへ手を突っ込んだ
「何で避難しないんだ！？」
と俺が咲に向かって言った。
「死ぬときは、龍貴と一緒に死にたい」
咲は作り笑いをし、そう言った。
俺はすこしその言葉がいやだった
「死ぬとか言うなよ、大丈夫。俺たちは死なない。逃げ切ってみせる」
と俺はすこし格好付けていったが、実際自分自身も死ぬ、と思っていた。

咲がそう言うのを俺はなんか嫌だと思った。
山田太郎はポケットに突っ込んだ手を出した。
そして手を開いた
そこには青く光っている丸い青い球があった。
それをこちらへさしだし言った
「アイツらが何か教えてやるよ、アイツらは、星渡(エンラス)だ。アイツらは自分の星を持たない、故に星を渡って生きている。いわば宇宙人だ。アイツらは来た星の生物を破壊するのが趣味なんだ、ムゴいだろ？」
「それで今回渡ってきた星が、ここ地球だ」
「アイツらを止める方法、それは暴力だ」
「それ以外にヤツらを止められない」
「もし、アイツらを殴る事ができたとしても、首をはねられるか、奴らが着ている特殊な爆発するマントを爆発させ、殺すだろう」
「死ぬかもしれないが、お前はそんな奴らを止めたいか？」
と新しい煙草をとりだし火をつけた。
俺は・・・再び言葉が出なかった。違う意味での言葉が出なかっただ、さっきは恐怖に言葉が出なかった
今は・・・自分の無力さに言葉が出なかった
「普通の人だったら、アイツらを止められないだろう。その為に、この球をつかうんだ。」
と後押しをかけるように山田太郎は言った
俺はすこし意味が分からなかった。
「球を使う？」

「展開が速すぎて分からないか、まあ、普通そうなるよな」
「人類最後の武器(エモノ)だ。大事に使えよ」
と言いその球を龍貴の前に投げ、山田太郎は姿を消した。
「球・・・どうやって使うんだろう・・・」

俺は、自分が無力だと言うことに改めて気付いたのだ

see you next time.

始まった人類排除（後書き）

何度も言うようですが、これはとてもひどい作品です、
見て後悔しないようにして下さい。
自分ではこの作品すごく自信があるんですけど
嫌いな人は嫌いなジャンルです

急激な進化・悪魔の姿（前書き）

この作品も４５ｐ完結ですので、キラーと同じように短いです。

急激な進化・悪魔の姿

投げ捨てられた球をじっと見つめていた。
群青色に光る青い球が俺の恐怖を和らげていた。
しかし、心の奥底からわく恐怖の感情に打ち勝てはしないのだ、俺はわけのわからないままその青い球を使おうとしてた。
「大事に使え・・・・って言われてもナァ・・・」
俺はこの球が一体何なのか、いろいろ思い浮かんできた、もしかしたら、投げて使うのか？
それともこれを星渡(アレ)の体に埋め込めばいいのか？　こいつはもしかして爆弾か？
そんな事を考えながら、俺はずっと球を眺めていた。
「龍貴・・・どうするの？」
後ろにいる咲が俺に聞いてきた
「そうだな・・・使い方ばっかり考えてても、意味ないよな・・・」
「あー！わっかんねー！」
俺はそう言い青い球を上方に投げた。
「はー・・・」
俺は仰向けに倒れた
ちょうど落ちてくる青い球を右手で受け止めようとしたときだった。
「・・・！！！あつっ！！！」
掌に青い球が当たった時、手が焼き焦げるような感じがした。
「ん。。。だコレ！？」
俺の右手から煙がもくもくと上がった。
俺は起き上がり掌を広げて見た。
「・・・なんだこれ」
俺はすこし驚いた。
すこしだけ驚いた
空を飛ぶ奴らのせいですこしの事をあまり驚かなくなったから、こ

れをあまり驚かなかった。
が、咲はすごく心配した。俺の右掌のことを・・・
俺の掌には大きな魔方陣が広がっていた。
その魔方陣の周りに大量の丸い粒が刻まれていた。俺はそれが星に見えた
魔方陣の中心には手を大きく挙げた人が居るように見えた。
俺はそれが星渡(アレ)の象徴に見えた。
「エンラス・・・」
俺はそう呟き窓の方へ歩いて行った。
「あの球がこの魔方陣にかわったのかな。。。」
「本当に展開が早すぎて、訳が分からないな・・・」
俺は悲しそうにそう言った。
咲は何も言わず、苦笑いした
俺は咲を見た後、窓の外へ目を向けた。
校門に生徒が5人程たっていた。
奴らはみんな俺の知人だった。
奴らは首を刈り続ける星渡(アレ)に向かい叫んでいた
「お前ら!!!もう止めろ!そんなことをして何が楽しいんだ!」
「テメェらカスが、人間様の兵器にかてるわけがねーんだよ!!!!
もうじき自衛隊とかがついたりするだろうが!」
「ミサイルがお前らを一撃で消す!」
「そうしたら、お前らはもう終わりだ!ここで諦めろ!」
奴らはすごくヒドイ顔で叫んでいた
恐怖と憎悪の染みたシワが濃い顔だった。
奴らの声が聞こえたのか、さっき俺たちをおそってきた星渡(アレ)が奴らの方を向いた
そして、

飛んだ

奴らはすぐさま学校の方へ逃げていった
「ちょ！待てよ！なんでオレ達を襲うんだ・・・あああああああああああああああああああああああ！！！！」
スパッ！！
彼らは
一瞬にして、星渡り（アレ）に首を飛ばされた。
俺は、目の前で知人を殺された憎悪に蝕まれた。
怒りが込み上がっていき　憤怒の感情が高鳴る
その時俺の右手が青く光った
刻まれた魔方陣がまるでホログラムのように掌の上に浮かび上がった
「んだ。。。これ」
俺は自分の頭に重みを感じた。
髪の毛が急に伸び始めたのだった、俺の髪が腰に達したときだった。
右手の光は無くなった
俺は目線を掌から窓の外へとそらした
「・・・！」
俺は驚いた、かなりの事じゃないと驚かない俺が、今驚いた。
異常な程によく見えるのだ
掌を見ている時何故気付かなかったのだろう。
全くぼやけないのだ。
例えば、ペンを見ている時、周りの物はぼやけて見える
一つの物を見ようとしたら、他の物はぼやけて見える、ソレだ
ソレが全くないのだ。
俺はもう一つ驚くべき事に気がついた。
俺の目は前に付いているはずだ。
なのに３６０度すべてが見渡せていたのだ。
人の視野は２００度ぐらいなのだが、俺にはすべてが見えていた。

主に肉食動物は獲物を狙うために両眼視ができる方がよく、目が顔の前にあるため狭い。草食動物では目が顔の横にあり、両目での視野は広い。これは肉食動物をできるだけ早く発見し、それから逃げやすいようにとの適応と考えられる。
では、今の前にあり、すべてが見える俺の目はどうだ、異常すぎるのだ。
この感覚に俺はすこし気持ち悪くなってきた。
急に重くなった頭や、憤怒や憎悪もプラスされてかなりひどい気分になっていた。
「・・・・何なんだこれはあああああああああああああああああああ！！！」
咲は俺を怖い物を見るような目で見ていた。
３６０度みえていて。後ろの事も振り向かないで見えるが、俺は振り返って咲を見ようとした。
俺が両目で咲を見たとき。
咲は俺に恐れをなしたのか、逃げ出した。
俺の気持ちはさらに複雑になっていった。
窓の方を向いた俺は、絶望に満ちた。
窓に自分の顔が反射してみえたのだ。
俺の顔はまるで悪魔だった。大きく目が見開き、口は牙を剥き、黒い血管が顔中を結んでいた。
おまけに長い髪の毛が逆立っている。
もう、生きているのが嫌になった。
俺は無意識のうちに、体を窓の外へ乗り出していた
「・・・もう・・・終わらせたい・・・」
俺はそう言い、窓の外へ飛んだ。
ブオッ！！！！
俺は自殺をしようとしていたのだった。
しかし、叶わなかった
俺の体は浮かんでいた。

「飛んでる。。。」
俺はドラゴンポーズで出てきた舞空術を思い出した
舞空術はこんな感じがしたんだなと思った

俺は行きたい方向へ飛ぶことが出来た。すこし・・・気持ちが良かった
俺はいろんな気持ちでいっぱいいっぱいだった。
そして、本題を思い出した。
「星渡り（アレ）を・・・・星渡（エンラス）どもを止める・・・・」
俺は足で空を切り自分達を襲ってきた星渡（エンラス）の方へ飛んでいった

ｓｅｅ　ｙｏｕ　ｎｅｘｔ　ｔｉｍｅ．

善悪

「エンラスゥゥウゥーーーーーーーーーーーー！！！！」
俺は、自分達を襲ってきたエンラスに向かって突っ込んでいった。
足で空気を切りどんどん前に進むその姿はまさに獲物を見つけた獣だ。
「てんめえええええええええええええええええ！！」
おれは目一杯右の掌を広げエンラスの首もとを掴んだ。
「お前ら・・・・・んでこんなことすんだよ！！！」
エンラスは全く動じず、口を開いた
「冥土の土産にきかせてやろう。おれの名前はフェウスだ。以上」
と言ってフェウスは体を扇風機のように回転させた
俺の手からは大量の血が出てきた、おれはそれに気を取られていた。
その隙にフェウスは俺の腹を強く蹴り、アスファルトへ落とした。
落ちる俺を追ってフェウスはついてきた。
俺は足を曲げて、無事着地したが、フェウスが立っている俺の上から踵を落とした。
「カッ！！！」
フェウスは倒れ込む俺を見て言った
「お前、もしかして俺のこと悪者って思ってるのか？」
「・・・ったりめぇだろ」
フェウスはすこし困った顔をした
「はぁ・・・お前ら人間はやっぱり嫌いだ」
「仮にこの行為を悪と認めたとしても、お前等の望み通りの悪だぞ」
俺はあまりの痛みに声が出ないままフェウスの話を聞いていた。

「おまえらは「死ね」ということばをつかう。死ねといわれたら、
死ねと言い返す
そして他の人が死ねといったらまたそいつに死ねという

これこそ「死ね」の連鎖だろ
お前等は命なんかどうでも良いと思ってるんだろ？だから『死ね』と言う言葉を使う、違うか？
お前等も悪なんじゃないか？『死ね』と人に言える時点で善じゃないだろ？
それとも何だ？口で言うのは悪じゃないけど実際に行動したら悪なのか？
そんな筈はないだろ。それは屁理屈って言うんじゃないか？
だから、その屁理屈を言っているお前等の為に
おれはその『死ね』を実現化させてやったんだ
今、始まっているのは『死ね』の連鎖じゃない。
これは」

『殺戮連鎖だ』

フェウスはそう言い俺の体を強く蹴り続けた・・・

「ガ・・・ハハハハハハ！！！！！」
「フ・・・ヘヘヘヘヘ・・・・」
校舎の屋上でずっと笑っている男が居た。

「エンラス・・・これで少しは減るかな」
校舎の屋上、そこで立っていた男は、山田太郎だった。

「くあっ！！！！」
俺は痛みを加え続けられ、まさに絶望に満ちていた。
俺はその時、無意識に口が開いた
「おい・・・フェウスって言ったな」
「あ？」
フェウスは蹴りを止めた
「一つだけ・・・質問させてくれよ」
「お前等は・・・どうして人を殺すとき、首を飛ばすんだ？」
わかっていた、こんな状況で聞く事じゃないと、しかし、命乞いが効くわけもない、だから、さっきから疑問に思っていた事をぶちまけたんだ。
しかしその答えがこんなにも単純だとは思わなかった。

「首を飛ばす理由？」
「理由か・・・理由なんてもんは無いと思うけど・・・強いて言えば。首を飛ばすのが一番気持ちいいからだと思うよ」
「お前が強者になって、殺すようになったらこの快感を味わうことができるだろうよ。」
答えが。

簡単すぎる。

浅すぎた。

俺は自分が聞いた事の無意味さを、知った。
俺は、あまりの絶望、憎悪、悲哀、苦痛、憤怒に言葉が出なかった。
悪魔のような姿をした自分から、涙がでるとは思わなかった。
涙が頬をつたって、アスファルトを潤した。
「う・・・うぅ・・・」
俺の中の悲哀が強くなってきた。
「・・・なんでだよ・・・」
「くそっ・・・！」
その瞬間俺の体から放射的に青白い光が広がっていった。
その光の押されてフェウスは飛ばされていった。
「なんだよ・・・これ・・・・」

バサッ！！！
「よぅ！龍貴君・・・だよね」
そこに山田太郎が居た。
青白い光の中から山田が歩いてきた。
「大丈夫だよ。今の君なら奴らを止められるよ。奴らのボスのフェウスさえ倒してしまえば。奴らはもう動けない」
「安心して暴れな。この地区の人はみんな俺が避難させておいた。」
「問題ない！」
そういい山田は煙草に火をつけた。
「行ってこい！！！人渡（ヒューラス）！」

そのネーミングセンスの悪さをすこし痛々しく思いながらも俺は立ち上がり、全力でフェウスの所へ飛んでいった

ズオッ！

山田太郎がフェウスの横へ一瞬にして飛んだ。
そしてフェウスの体を固定した。

「やれ！！！龍貴！！！！！」

俺は腕に精神のすべてを集中させた。
そして一気にフェウスを貫こうとした。
フェウスは山田を振り払い、山田の方を振り向き叫ぼうとした
「ボ・・・！！！！！！！！」
フェウスが言い終わる前に俺の右手がフェウスの心臓を貫いた。
俺の右手から出た衝撃波は町全体を飲み込んだ。周りの高層ビルが次々に倒れていった。
そして、砂埃が舞った。

一瞬にして、俺は命を奪った。
俺は、すこし快感を得てしまった。
人が死んだというのに、快感を得てしまった。
達成感から快感を得てしまった。
自分がしていることが彼らのしていることを同じように思えてしまった。
「俺・・・悪だ・・・」
山田太郎が空中で浮かびながら言った
「悪？この何が善で何が悪かわからない世界で、そんな区別なんかねーよ、この世に善悪の区別なんぞねーよ」
俺は山田が飛べていることに疑問を抱かなかった
「他の奴らも止めてこい。いや、殺してこい。お前ならできる。」

俺は聞き終わったらすぐに、他の奴らの所へ、飛んでいってしまった。
俺はこの時点でもう、感情が無くなりそうだったのかもしれない。

ｓｅｅ　ｙｏｕ　ｎｅｘｔ　ｔｉｍｅ．

善悪（後書き）

やばい。このペースだと次回で最終回かも、多分、絶対、じゃあ、殺戮連鎖、最終回です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6527z/

殺戮連鎖

2012年1月6日19時49分発行